チャイルド・ロック

kae

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チャイルド・ロック

【Ｎコード】
Ｎ８７３２Ｚ

【作者名】
ｋａｅ

【あらすじ】
冴えないバンドで日々の生計を立てている青年、ロズリンド・エヴァレットはある日突然姉の遺児である少年を引き取ることに！
少年との交流で深まる絆。
彼らはこれからどう変わるのか？

※私自身のサイトにも同作品を転載しております。

#01

―俺は順調に人生を歩んでいた
着実に富と名声を手に入れてきたんだ―

本日このボックスで演奏したバンドはステージでのショウを終え、舞台から姿を消すと楽屋へと戻っていった。
客の反応はイマイチ。一部、彼らのコアなファンはいつも通り、大分イカれていた。
バンドメンバーはお互いに挨拶を交わすこともなく個々が別々の行動に移る。
例えば、ベースの男は早速ドラッグに手を伸ばし　ドラムの男は電話で女を呼び出し、ギターの男はといえばキーボードの女とソファにてお楽しみに入るところといった具合だ。
肝心のヴォーカルは？彼はこのごった返した楽屋を出、ボックスの外で煙草を燻らせていた。
あのメンバーのまとまりの無さと無秩序なところが、彼は嫌いであった。
だからといって彼等に干渉するのも嫌だった。
俺は本当にこのままでいいのか？彼は今日も自問自答する。
前のバンドを辞めて誘われるがままに今のバンドに入った次第だったが、前の方が断然マシだった。　メンバーは親友も同然だった。

男はふと我に帰ると、煙草を捨て楽屋へ荷物を取りに行こうかと足を進めた。
その時、「失礼、ロズリンド・エヴァレットさん？」
名を呼ばれて振り返ると一人の男が立っていた。糊のきいた高価そうなスーツとこれまた高価そうなコートを身につけている男だ。

男は片眉を上げて彼を見つめていた。
「…だったら何だ？あんた警察？俺はヤクの密売なんてやってないぜ」
ロズリンドは男を睨みながら答えた。
男はロズリンドにふっと微笑みかけて「いや、わたしは警察ではない。アーサー・ブラック、弁護士だ。ローザ・エヴァレットの」と言った。
「姉さんの弁護士？そんなやつが俺に何の用だよ…」
久方ぶりに姉の名を聞き、ロズリンドは郷愁の思いに駆られるも、何か嫌な予感がした。
「…聞いていないのかね？…」
アーサーの表情に陰りが表れる。
「君の姉ローザは亡くなったんだ…昨日」
「…！？」
ロズリンドはあまりに突拍子すぎる彼の言葉に絶句した。
姉が…何だって？あまりにも急すぎる。
「死因はまだ調査中だ」
アーサーは淡々と話し出す。ロズリンドの困惑はますます募るばかりだった。
「でも…なんで、」
「詳細はまだ調査中だ。だが彼女の夫のチャールズに殺人容疑がかかり拘留中となっているよ」
「チャールズだと？」
ロズリンドはチャールズをにわかにではあるが、覚えていた。初めてあった当時は人当たりの良い人物だという印象はあったが、その頃からバンド生活に入り浸っていたので姉や家族との交流も疎かになっており、どういう性格だったかまでは覚えていない。
もし、その彼がローザを殺したのならと考えるとロズリンドは怒りが沸々と沸き上がってくるのを感じた。
やり場のない感情が自身の中で渦巻いている。

そのような彼の葛藤を表情から読み取るも、
弁護士は話を続けた。
「ところで、君には甥がいることをご存知かな？ロズハート・エヴァレット君というのだが」
「…会ったことはねぇけど名前は知ってる。ガキが生まれたって手紙で読んだから」
ローザの結婚式以来は家族の誰とも会っていない。その頃は丁度前のバンドで売れていて世界のあちこちでライブをしていたからだ。なので甥の存在は手紙と赤ん坊が写った写真でのみしか知らなかった。
「そうか、まぁそれでも構わない。少し時間をくれないか？わたしと一緒に来てほしい」
「は？待てよ、何でそうなる？俺に何の関係があるってんだよ」
「まぁ、詳しい話は後にしようじゃないか。頼むよ、どうせこのあとに予定なんて無いだろう？」
弁護士はにやりと意地の悪い笑みをロズリンドに向けている。
「ふざけんなよ弁護士さん。こう見えてこのあとも公演があるんだ、お断りだね」
ロズリンドがこう返せば、アーサーの口角が真一文字に戻り、険しい表情になった。
「残念だが、法律の下で君が断ることは認められない。嫌でも来てもらおう」
ただならぬアーサーの威厳に少し怯んだ。このまま強行突破して逃げようかとも考えたが、姉のことが引っ掛かる。
それに、楽屋にいるあのバンドメンバーたちにはもう会いたくなかった。
あの汚いメンバーたちをとるか、姉をとるか、
答えはすぐに出た。
「…わかったよ、あんたと一緒に行く」
「どうもありがとう。彼らはいいのかね？」

「ああ、いいよ。どうせ俺のことなんて気にしちゃいないさ」
そう言うと弁護士は満足そうな表情を見せ、電話で車を呼び出した。
数分もしないうちに車は到着し、乗り込んだ。
出発して振り返りボックスを見やれば、予想通り誰もいない。
誰もロズリンドを見てはいなかった。
過去の、車に乗り込み窓から振り返り見れば大勢のファンが自分達を見送っている、光景が頭を過ったが、現実にはならない。
今まさに見ている光景には誰もいないのだ。

「ところで、君はなぜあのバンドから抜けたんだ？わたしはあの頃の君が一番良かったとおもうよ」
この弁護士の一言にロズリンドは今日一日で最高の睨みを相手に送った。

#02

ロズリンドが弁護士に連れられてやって来たのは裁判所。
裁判所の中は皆が皆、スーツを着こなしては真面目そうに裁判所内を行き交っているので、ロズリンドにはそれが酷く狭苦しかった。
第一に、自分の容姿からして不釣り合いだ。
「こっちだ」
そんなロズリンドの気持ちを知ってか知らずかアーサーは相変わらずの様子で、ある一室へと彼を案内した。

案内された部屋に入ると、一人の男の子が座っていた。
こちらが入室していても、見向きもしなかった。
「やぁロズハート。随分待たせてしまったね。君の伯父さんを連れてきたよ」
「…」
ロズハートはロズリンドを一瞥すると、すぐにまた正面を向いてしまった。
いくら姉の子とはいえ、あまりの愛想の無さにロズリンドは大人げなくも少し腹がたった。そう、少しだけ。
「…ロズハート、歳は１０。ここからが重要だロズリンドさん」
二人を見かねたアーサーが少年の紹介をした。
そして、ごく真剣な顔で「今では君は彼の親権者なんだ。よって彼を引き取ってもらいたい」
「……？！」
ロズリンドは本日二度目の驚愕にまたもや絶句した。
そして何故自分が親権者となるのか訳が分からなかった。
「何で俺が？！」
漸く言葉にすると、目の前にいる弁護士は実にあっさりと答えた。
「君の姉ローザの遺言だ。彼女は亡くなる前に病院の看護婦に告

げている。ロズハートをロズリンドの元へ、とね」
「……は、」
ロズリンドは開いた口が塞がらない。姉がロズハートを自分に託した理由がやはり分からなかった。
「な、なぁ待てよ。俺には無理だって分かるだろ？それに俺の他にも親戚はいる！」
「確かに君よりも相応しい引き取り手はいる。だが少し君のことを調べさせてもらったが、今の君でもこの子を引き取ることは十分問題無いんだ。我々としてはローザの遺言を尊重したい。もう一度よく考えてくれ」
姉の顔が脳裏に浮かんだ。そしてこちらに見向きもしないロズハートを見た。
だがやはり、幼いこどもを引き取る自信は無かった。
「なぁ、ブラックさん。前の俺だったら少しは財布にも余裕あったんだが、今の俺は自分が食うだけでも精一杯なんだぜ？」
「そこは安心してくれ、国から援助が出るはずだし、我々もいつでも君たちの助けになろう」
「う……」
これはどうしても引き取らねばならないのかもしれない。
どうしたものか考えていると、ずっと黙っていたロズハートが口を開いた。
「僕は行かない。その人は僕を引き取るのが面倒くさいだけなんだ。そんな人の所なんかこっちから願い下げだよ」
そういってロズハートはロズリンドを睨みながら部屋を出ていってしまった。
「あ、ちょ…」
バタンとドアが閉められ、気まずい沈黙。
わざわざアーサーの顔を見ずとも、彼が静かな怒りをぶつけていることはひしひしと伝わってきている。
「君はそんなに薄情な人間ではないはずだが、わたしの検討違い

だろうか？…いいかい、君が彼を引き取らなければ彼はどうなるんだ。彼にとって君だけが唯一の救いなんだぞ？ローザの意思を無駄にしてはいけない」

「……」

アーサーの言葉を聞き、ロズリンドは意を決した。どのみち崩れてきた人生だ。今から立て直すのだって遅くは無いだろう。

それに、あのロズハートの目が何故か頭に焼き付いて離れなかった。強がって反抗こそはしていたが、傷付いている目。

彼は母親を失ったばかりだ。父もいない。それで傷付かないこどもが居るわけがない。

そう思ったら、いてもたってもいられなくなった。

「分かったよ。あいつを引き取る。正直良い暮らしさせてやる自信なんて無いけどな」

「…そういってくれて嬉しいよ。なに、君なら大丈夫さ。何かあればいつでもわたしを頼ってくれ。必ず力になろう」

「あぁ、どうも」

アーサーの連絡先の載った名刺を受け取り、ロズリンドも部屋を出、ロズハートを探すことにした。

#03

裁判所内のあちこちを探してもロズハートは見つからない。ロズリンドはおもむろに舌打ちをした。
「なぁ、10くらいのガキみかけなかったか？」
道行く人に聞いてみるが成果は無かった。
ふと、小さい頭が見えた気がして、そちらへ急いで行ってみると、小さい頭の正体はむすっとした顔でベンチに座り込んでいた。
「やっとみつけた…」
内心へとへとのロズリンドはどかっと勢いよくロズハートの隣に座った。
「よぉ、ロズハート…だったか？」
「……」
ロズリンドの挨拶を清々しく無視している。
「…さっきは悪かったよ。お前を引き取ることにしたんだ、だから一緒に帰ろうぜ」
正直、こどもの扱い方なんてさっぱりなロズリンドであるが、彼なりに考えて優しい言葉をかけた…のであるが。
「あんたが誰だか知らない。知らない人にはついていかない」
実にきっぱりと、隣の少年は答えた。
クソガキ…と思わずにはいられないロズリンド。
「…はいはい。俺の名前はロズリンド・エヴァレット。俺にとってお前の母さんは姉貴だ。だからお前と俺は親戚同士ってわけ、何か質問は？」
「それじゃあ、あんたは僕のおじさん？それで今日からあんたが僕の保護者？」
ロズハートはまだ心を開いていない様子で、訝しげな目でロズリンドを見つめている。
彼の瞳は姉と自分のような灰色がかった青色だ。こども独特の澄ん

だ瞳。この瞳を見ると、引きとって良かったと思う。
「…あぁ、そうなるな。不満か？」
「…まぁね」
前言撤回。
「そうかよ、じゃあ勝手にしな。俺は帰るからな」
そう言ってロズリンドはベンチから立ち、裁判所を早足ででようとした。
途中、やはり彼のことが気になって後ろを振り向くと、未だ不機嫌そうなロズハートがついてくるのが分かった。
何故だか少し嬉しくなった。面倒くさいことになっているというのに。
「何だ？ついてくることにしたのか？」
振り向かずに言いながらそのまま、裁判所を出る。ロズハートは駆け寄ってきた。
「…お腹空いた」
「そうだな。じゃあまずはお前ん家にいって荷物纏めてからピザでも食おう」
我ながら悪くないプランだとロズリンドは思った。このまま道なりに歩いて行けば仮住まいしているアパートにつくし車もある。
「荷物なら心配いらないってアーサーが言ってた。もうあんたの家に届けておいたってさ」
「…まじかよ」
最初から俺が引き取ることに拒否権は無かったってわけね、と若干背筋に悪寒が走るのを感じた。
「ＯＫ、じゃあ家でピザとって食べよう」
「あんたの家ロクな食べ物無いの？」
「うるせぇ。ピザだって立派な食いもんだろ。それと、そのあんたって呼ぶのやめろ」
先程から多少感じていた違和感に気付いた途端。引き取った相手に対してあんたとは何だ、大体何であの弁護士の名前はちゃんと呼ぶ

んだ、だとか複雑に色々な思考が行き交った。
「じゃあ何て呼んで欲しいわけ？ロズリンドさん？おじさん？それともおいたん？」
ロズハートはロズリンドを見上げながら言った。ロズリンドは実に微妙な表情をしており、ロズハートは瞬時に困らせてしまったのだと悟った。
だがロズリンドは「ロズでいい。おじさんなんてじじくせぇ」と至極真面目な顔で言った。
それが理由であの表情をしていたのだと思うとロズハートは何だか馬鹿馬鹿しい気持ちになった。
一瞬でも申し訳ない気持ちになった自分を褒め称えたい。まだ１０歳なのに。
「…じゃあ、僕のことはハートでいいよ。ロズだとややこしいからって母さん言ってたんだ」
「そうか…」
二人の間に静かな沈黙が走る。
この沈黙の中で考えているのは、二人とも同じ人物の事だ。

お互い黙って歩いているうちに、ロズリンドの住むアパートに着いた。
ロズリンドがロズハートを入るよう促すと、ロズハートはこれから我が家となるアパートを見上げた。
そして、自分を見つめる彼の同じ色をした瞳を見つめ返した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8732z/

チャイルド・ロック

2011年12月27日22時47分発行